

Title	臨床死生学・老年行動学講座が与えてくれた生き方 : 上手に助けを借りること
Author(s)	大橋, 明
Citation	生老病死の行動科学. 23 P.21-P.22
Issue Date	2019-03-09
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/73615
DOI	10.18910/73615
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

臨床死生学・老年行動学講座が与えてくれた生き方

—上手に助けを借りること—

Finding a new way of life in Department of Clinical Psychiatry and Geriatric

Behavioral Science: Embracing my weakness

(中部学院大学人間福祉学部) 大橋 明

(Faculty of Human Well-being, Chubu Gakuin University) Akira Ohashi

講座開設 25 周年、おめでとうございます。

講座史上最低の研究力・実践力・人間力の私がおこなうような文章をお寄せするのは非常に恥ずかしいですが、若い方たちには下方比較を通して「自分でも何とかなる」と志高く邁進していただければと思います、恥を忍んでキーボードを叩く決意をしました（単に自己顕示欲が頭をもたげただけです）。情緒的な文章となることを諒していただければと思います。

1. 在籍中に問われた自分の生き方

数え切れないほどの選択肢があり、ひとつ道を変えたらまったく別の方向に進む可能性がある中で、なぜ私は老年心理学や死生学を目指そうとしたのか、今でも時折振り返ります。小学生の折、飼っていた兎が外敵に襲われ、解剖図通りの姿で横たわっていたこと、目の前を行進していた蟻に凸レンズで光を当てて一瞬にして葬ってしまったことが心に残っていたのかもしれない。あるいは福井県の崖から落ちかけた、海で溺れて死にかけた、10 歳の時に高齢の身内を立て続けに喪って死への恐怖が 1 年ほど続いた、大学の先輩が勤務する老人病院を見学した時女性が無表情のまま入浴介助を受けていたことなどが意味をもっていたのかもしれない。そんな人生経験を通して「老いと死」について学びを深めたいと考えていた矢先、1993 年 5 月 12 日の朝日新聞に掲載されていた柏木哲夫先生の記事を偶然拝見したことが人生を決めました。

1995 年 4 月から臨床老年行動学講座（臨老）に研究生として在籍し、次年度に博士前期課程に受け入れていただきましたが、柏木先生、山本一成先生、

山本恵子先生という優しい先生方に囲まれました。柏木先生は「臨老の学生たちはよくできる……例外もいますが」とよくおっしゃっておられました。先輩方も同期の人たちも、そして後輩の皆さんも本当に力がおありで、「例外」の自覚があった私は強い劣等感を抱いていました。自分の研究についてどなたかに相談する・頼むということは、自らの無知無学をさらけ出すことになるわけで、当時の私には身の置き場がないと感じるほど恥ずかしいことだったので。柏木先生は「上手に助けを借りることができるのは健康の証」ということもよく話していらっしやいましたが、私はまさに不健康でした。

そんな私を、先生方や講座の皆さんは、寛容にも見守ってくださっていたように思います。博士論文作成で悶々としている時に卓球や食事に誘ってくださったり、インタビューのテープ起こし、論文のチェックを手伝ってくださったりする中で、できないものはできない、できることはとことん努力する、赤っ恥をかいてもいいじゃない、力を貸し借りしましょうという、今となっては当たり前前にできることをようやく身につけることができました。赤字で「わからん」「？」という文字をどっさり書いてもらった博士論文の添削原稿は今でも宝物にしています。

臨老は私にとって「研究者」としてはもちろんのこと、「人間」としての生き方を問われる場所でした。本当に多くの方たちから有形無形の力をいただいて、今ここに生きています。

2. 現在の仕事に活かしていること

現在勤務する中部学院大学は、岐阜県関市と各務

原市に2つのキャンパスをもっている小さな私立大学で、タヌキやネズミ、サギともよく出会う、自然豊かな場所にあります。虫や鳥たちが講義棟内に忍び込むことも多く、外に逃がしてやることは日常茶飯事です。

本学は社会福祉士、介護福祉士、看護師、理学療法士などの国家試験受験資格を得るための学部から構成されています。これらの資格を取って活躍する上で、「老いと死」に関する知識を得ることは必須です。心理学や老年学、死生学に関連する講義を担当する中で、在学中に学んだことはもちろん（それはいかに笑いを取るかを大いに含みます）、臨老にゆかりのある方の研究論文や学会発表を幾つも紹介して講義を行っています。

また、修士論文や博士論文の指導・審査を行っています。論の組み立て・展開といった論文構成の作法という根本について言及することが多いです。これは自分が博士論文を作成した折や研究科紀要等で執筆した時に、仲間たちに多くのダメ出しをもらい真っ赤に添削してもらったこと、「よりわかりやすく伝えるためには何が必要か」と問い続け幾度となく書き直したことが非常に役に立っています。

加えて、カウンセラーとして学生相談も担当しています（当時は臨床心理士の受験資格を得ることもできました）。私の勤務先には、健康的な学生はもちろん多くいますが、アイデンティティの揺らぎの中にいる者をはじめ、いじめや被災など過去に壮絶な体験を重ねてきた者、コミュニケーション能力が少々不足している者、心身を傷だらけにする者、大学の講義にまったくついていけない者、仮想的有能感だらけの者、いいところもあるのに自信なく卑下してしまう者などがいます。「いつか来た道」と微笑ましく感じたり微かないたみを感じたりもしつつ、目の前の学生が社会に飛び立てるよう、信頼できるたくさんの仲間や関係機関と連携し合いながら援助するのも私の仕事のひとつです。この連携力や対応力も臨老での日々が育んでくれたように思います。

このように、教育、研究（ろくにできていませんが）、臨床において、さまざまな力を周囲からいただいています。その中で忘れることができないのは、日本老年社会学会第56回大会（2014年）の運営

です。事務運営会社、会場地となった下呂市の皆さんにはもちろん、学会に所属する研究者のみならず非会員の方々のご協力を得て無事終えることができました。臨床死生学・老年行動学講座の皆さんはなんとバスをチャーターして下呂温泉までお越しくださいましたが、このような温かなサポートが何物にも代えがたい支えとなりました。

周囲の人たちのご厚意に素直に頼る勇氣、「上手に助けを借りる」という力を育ててくれたのは臨床老年行動学講座、そして今の臨床死生学・老年行動学講座の皆さんのおかげだと思っています。

3. 今後の臨床死生学・老年行動学講座への願い

今から考えますと、臨床老年行動学講座を通しての出会いには非常に恵まれました。

例えば、故藤田綾子先生には学生としてご指導を賜る機会はありませんでしたが、お目にかかるたびに温かなお言葉をいただきました。恒藤暁先生は私が博士論文を提出する数か月前に赴任されたのですが、たくさんの時間をかけてご指導くださいました。現在講座を守ってくださっている佐藤眞一先生、権藤恭之先生には長年可愛がっていただいています。さらにはうんと歳の離れた後輩の皆さんからも頻繁に声をかけてもらっています（あまりにたくさんいらっちゃって、名前を挙げるできません）。できの悪い私ですが、この関係性をいただいたということも、この講座に所属したことによるかけがえない財産です。それもこの臨老が懐の深い講座であるということに尽きると思います。今後も卒業生や修了生にとって、また新たに入ってくる学生さんたちにとって、そのような場であってほしいと願っています。

今の自分があるのは、あの頃があったからこそ。その「あの頃」を思い出させてくれる講座が連綿と受け継がれていくことは所属していた者としても本当に嬉しいことです。25年をお迎えになったことを心から喜び、そして開設50年に向かってのますますのご発展を心からお祈りしております。